



NEET・若者の自立・ 仕事おこし

佐藤洋作（NPO 文化学習協同ネットワーク代表）

はじめに

昨年の秋、コミュニティビジネスをベースとした仕事おこしということで、若者たちの手によるパン屋の事業を始めました。今、なぜ若者の仕事おこしなのか。また、私たちは、どのような働き場を若者とともにつくりあげていく必要があるのか。若者はそれをどう求めているのか。私が今までに出会ってきた若者たちの言葉や表情を通して、具体的な挑戦の経過報告やそれに対する思いをお伝えできればいいかなと思います。



メディアのニート報道の恣意性

この間、ニートという言葉が出てきて、若者の雇用対策が政府の緊急の課題としてにわかに浮上しています。とくに、働く意欲が不十分な若者の意欲や能力をどう向上させていくかが課題となっています。厚労省の聞き取り調査を何度か受けましたが、彼らの状況把握は不十分です。どうやら、自立できない若者を鍛え上げて、今後予想される社会的コストのリスクをどう回避するか、社会の労働力として若者の社会的自立を促すためにはどうするか、と考えているようです。フリーターの時も、若者の要求と現実が合わない、だったら若者を現実に合わせるようになんとかせ

よ、という論調が主流でした。ニートの問題に関しても、基本的には、どうしようもない若者を訓練し、意欲のある若者へと鍛え上げながら社会に取り込んでいくという視点が基調だと思います。

私たちのパン屋の立ち上げに際してもメディアがたくさん来ましたが、とくにテレビの取材は結果的に断りました。宣伝チャンスですから断る必要はないのですが、「どうしようもない若者を鍛え上げるトレーニングの場ができた」という角度から取材をさせてくれということが多かったのです。このパン屋は、若者が新しいもうひとつの働き方、生き方をつくりだす試みであり挑戦なんだ、ばらばらではない共生の地域を

つくっていくひとつの挑戦なんだという角度で編集できないだろうか、とディレクターが来る度にかなり時間を割いてお話ししましたが、「方針と合わないようですので見合わせてください」という答えがほとんどでした。

力のない若者に対する人間力の強化や、若者自立塾、鍛え上げの施策に金がつくようですが、どうも違うのではないかと思います。若者を訓練の対象とするのではなく、若者自らが育っていく、自立していくという当事者主体の立場で、若者をどう捉え直し、どのように新しい働き方を彼らとともに作りだしていくか、そういう視点でなければ若者は動かないと思います。

続かない仕事

若者の離職率が問題になっています。働いてもすぐやめてしまう。3年以内にやめてしまう若者が、大学卒で3割、高校卒で5割、中学卒では7割で、一般的に七五三と言われています。なんとかどこかの仕事に引っかかったとしてもあまり続かない。

私の娘も去年の春、小学校の教員になりましたが、半年もしないうちに休職してしまいました。団塊の世代が退職していくこともあり、教師もかなり採用されるようになっていますが、まだまだ狭き門です。それでもやめる初任者が多い。学校にも人事管理が厳しい形が入ってきて、教職員の教育の自由が限りなく狭められています。職務会議は上意下達で、管理職が方針を降ろすだけ、事務的手続きを通達するだけの場になっている。組合員の教師は自由にものを言える状況ではない。そういう場に慣れていない若者、とくに私たちのようなところ

で育った若者は、「何これ、ものが言えないの?」「もの言えない教師たちが子どもたちにはものを言えて言うの?」と疑問を持つ。子どもに向かっては、「自分を表現しましょう、みんなとともに作りあげていきましょう、みんなで感動を共有しましょう」という話をするのに、教員同士はものを言わずにその場をやり過ごすだけ。疑問を表情に表すと、「あなたは教員には向かないんじゃないの、他の仕事を考えたら」と入ったばかりで肩たたき。学校は育てる場所ではなく、即戦力、あるいは競争力を持った人間を選択する場所になっている。もはや自分を変えることはできないと言って、中高年の教師もどんどん離職していますし、子どもどころか教員自身が心理カウンセラーに相談に行くという事態が進んでいます。学校は、自分が育っていく夢、人生を切り拓いていく希望を紡ぎだすことができない職場になっていると思います。

学校から社会への中間施設の必要性

おそらくこのような青年たちの苦悩は、かなり大きな広がりを持って蓄積されていると思います。生きづらさを抱えた青年たちが、様々な精神疾患に追い込まれてしまう。みんなで育ち合っていこう、みんなで作ってあげていこう、という生きるために重要な根本のところ崩されています。若者が社会に離陸していく入り口のところで、即戦力重視で使える人間が求められる。使えない人間はいらぬ門前払いの現実が進行している。青年が社会的な自立を成し遂げるために、もう少しルーズな時間が社会

に立ち上がっていかないと、どう考えても一人前になっていけない。自由な形で研修し学び、学びながら働き手となっていく、そういう仕組みがなかったら、そういう機会がどんどん減っていったら、社会的引きこもり、ニート状態の若者はもっと広がっていくだろうと思います。

ニートの若者は、働く場を失い、働く意欲を失っています。自己実現という言葉がよく使われますが、自己実現を目指す青年は相当活力のある青年です。自己実現そのものの希望さえも見失ってしまっている社会的に排除された青年が一気に広がっていることは間違いない。そこへどう手を届かせるか。したたかに生きていける人間、出会いを探しながら自分を探していける青年はいいのですが、それ以前のところで立ち止まってしまい、引きこもってしまっている青年にどう手を差し伸べるか。このテーマがいつもすっぱり落ちてしまう。それを「負け組」として切り捨ててしまうのか。しかし、切り捨てられない。

居場所から社会へ

私たちは、社会的自立の前に立ち止まってしまっている子どもや若者の心の傷に寄り添いながら、彼らが自信や人や社会に対する信頼感をもう一度回復していけるように、とさまざまな取り組みをやってきました。彼らを支えながら、彼らを主体として迎え入れることのできる

ような仕組みができないかと思ってきました。引きこもっている若者に対してそのままでもいいよ、と言いながらも、そのままの状態がいたずらに延びることは本人にとっても不幸です。次のステップへの挑戦を支える必要があります。「仕方ない、それでいいよ」と言われ続けることによって18年間も引きこもってしまったという女の子がいましたが、彼女のように強制的にでも次のステップを提供してほしいかという場合もあります。声にならない訴えを秘めながら、じっとしている若者もいっぱいいます。どのように提供していけるかは大人の課題です。そういうわけで、居場所からの次のステップへの挑戦を始めました。

若者を包む3つの不安

厳しい雇用状況を背景にして、若者たちの仕事選びが慎重になっています。それから、若者を立ちすくませる3つの不安が若者を覆っています。一つは将来の不安。就職難やリストラといった将来の就業機会を奪われることへの不安です。二つめは、働くことへの不安。労働現場を覆う能力主義的な競



争に対する恐れや自分が望まない仕事への強制的従事、長時間労働など非人間的職場環境への忌避感情が非常に深いと思います。マスコミやいろいろな所から、労働現場の苦しい状況を見聞きしたり、家族の状況を見たりしながら、彼らの中で明らかに従来の働き方への危機感情が高まっています。三つめは、自己への不安。少々のことであっても俺はやっていける、という自信、自己肯定感情が育っていません。我々団塊の世代は、たとえ何も実態がなくても自信だけはあつたりするのですが、彼らは生きていく根っここのところの自己というものがなかなか立ち上がっていかない。職場の人間関係の不安、自分は受け入れられないのではないかという不安が非常に大きいのです。

自己への不安に立ちすくむ若者

Y君は典型的な生きづらさを抱えた青年です。中学時代は学校には行っていましたが、あまり勉強せずにほとんど遊んでいました。何かしなくては、と夜な夜なギターを抱えてバンドをやっていました。高校は普通高校に入れなくて農業高校に入り、ほとんどアルバイトに明けくれています。彼にとって学校は、夜に必要なエネルギーを回復させるために眠りに行くところでした。卒業しても就職活動は一切しませんでした。そのままアルバイトを続けました。でもこのままアルバイトを続けていても、という思いがあって、「目を覚ましてくれるような働く場所はないか。東京から脱出したい」と言うので、愛媛にあるみかん農園（無茶々園）に送りました。1年間一生懸命働きました。ふぞろいのみかんを時々送ってくれたりしました。みかんと会話をしながら、「こ

れからどう生きてらよいか」と思いめぐらす哲学的な日々を送ったようです。帰ってくると、「次はないか」と言う。仕方がないので、運送会社（つばさ流通）に送りました。これも結構真面目にやって、社長に「正社員にならないか」と言われましたが、まだ勤める気にはならないようでした。彼らはなかなか自分の一生を決めたくないんです。先延ばししたい。次に「小綺麗な仕事はないか」と花屋に行き、何ヶ月かやりました。花屋は意外と小綺麗ではなくて、水を使うので汚くて冷たくて大変な仕事でした。今度は沖縄に行くと言って、今は石垣島の飲み屋でバーテンダーをしています。

彼はものすごく誠実で、働くと言えば真面目に働く。それなのに定着しない。彼らの思いと現実、何がずれているのでしょうか。それでもこの子にはエネルギーがあります。これでもない、あれでもないと何か自分が生かされる仕事を探しているわけです。

村上龍の「13才のハローワーク」という本は100万部売れたそうですが、「好きなことを仕事にしよう」というのはちょっと矛盾があると思います。仕事は好きになるものです。「好きになる可能性がある仕事に就こう」と言うほうが、まだ間口が広いのではないのでしょうか。

それと昨日、28歳になる若者が訪ねてきました。少しならいいよと言って、結局4時間も話を聞いてしまいました。なぜかと言うと、もう終わりにしようとするのでできない青年だったからです。彼は、小学生の頃から順を追って話してくれました。とにかく聴いて欲しいのです。「聴き取られたい」と思っている子どもや若者はものすごく多い。親にも、学校にも、社会にも思いを聴き取られていないのです。ですから、聴き

取ってもらえるところでは非常に多くを語る。そこまで言うか、というところまで語る。ということで4時間に至ってしまいました。

彼は優等生でした。小学校のときは非常に人気があって、中学校では少々頑張ったから成績が良くなり、生徒会に連れ込まれて一生懸命やった。そして副会長になった。しかし、家庭や学校でいろいろあって、真面目な青年が高校受験までにひとつの挫折を迎えます。神経症になってしまう。高校は進学校に一応入りましたが、一度調子を悪くすると、エネルギーがマイナスになっている自分を人が否定的に見ているのではないかと感じてしまい、人との関係がぎくしゃくしてくるんです。そしてとうとう学校に行けなくなり、病院にかかる。それでも勉強への思いは消えなかったのので、2年遅れて定時制高校に入りました。でも2年下の子と意見が合いません。そこでまたぎくしゃくする。専門学校に行ってみたり、予備校に行っただけで大学に挑戦したり。中学校のときベスト3で争っていたあとの2人は東大に入っているの自分だけ変な学校には入れません。頑張り屋だからあるところまで頑張ったけれども、ぷっつんと切れてしまった。そして1年間くらい引きこもりになる。

そういうことを何度も繰り返しながら、今は東京へ出てきて派遣で働いています。不安を押し消すように、空いている時間はすべて仕事を入れて、ほかのことを考えなくてもいいようにしている。「人にはクールであり自分を語らないで孤独を楽しむタイプの人だと思われると思う」と言っていました。そうやって自分に隠れ蓑をつくって生きている。28歳までの自分のキャリアは一切封印し、先のことはあまり

考えずに、平凡な人間として一日一日をどう生き延びるかを考える。

そこへこの春、職場にかわいい女の子が現れた。それでおかしくなった。こんな俺で付き合えるのか、自分を語らずにごまかしながら生きていくのは嫌だともうごく誠実なんです。自分はほとんど最低で生きていて、それを見ないようにしていたのに見ざるを得ない状況が生まれた。不安定な中でつくられていた安定が崩れ始めてきた。それで私に相談しに来たんだろうと思います。「出口がない、出口がない」と言っていました。「僕はこれからどこへ行けばいいのかわからない」「こういう青年でも生きていけるモデルが欲しい」と。中学校までの栄光の日々が毎日フラッシュバックしてきて、現実とのずれで居たたまれなくなって死にたくなる。あまりにもみじめだと思ってしまう。

やりたい仕事探し

今、何ヶ月たっても満員で予約がとれないほど心療内科が流行っています。将来に対する不安、このままで生きていけるのかという不安、自分のみじめな現実を見せつけられた時の不安を抱えている子どもや若者は、この世の中に自分の居場所はどこにもないと叫んでいるような感じがします。どうしようもない不安感情やみじめ感というものが広がっている。そういう中で、何とか自分を保つために好きな仕事を見つけようとする。

高校を卒業した若者を受け入れる専門学校にはいろいろあります。バス釣りやスケボーのプロを目指す学校とか。それで一生食っていけるのかと疑問に思いますが、授業料が何百万円もする。1、2年の間、不安

な感情を消すための一時期のモトリウムをやっているに過ぎないですね。それに巣食う教育産業がいっぱい広がっている。

私のところを卒業した子どもは、スケボーのインストラクターの専門学校に200万円払いました。途中で骨折して、半年も通わないうちにやめてしまいました。今ガードマンをやっています。そういう若者が周りにはたくさんいます。なんとかならないのかといつも思っています。でもなかなかなかなかならない。若者たちの進路は、引きこもり感情が屈折している混在しながら、ジグザグしています。具体的な仕事探しを先延ばしにして、とりあえず「やりたい仕事探し」に逃避しているのではないかと思います。

高校を中退して魚屋でアルバイトをやっている子がいました。その子が湾岸戦争の報道を見て、「あれ、俺行けねえかな」と言うんです。「危険でもいい、終われば終わった時だよ」と言う。そういう若者たちの声を聞くと、彼らは健気によく生きていますが、その向こう側には悲しみや不安が渦巻いているんだと感じます。そうしないとこれだけ神経失調症にはなりません。一緒に生きていこうという社会連帯の仕組みなり、文化なり、気風なりが豊かにあるならば、こんな予想もつかないような状況が生まれてくることはないと思います。練炭での集団自殺とか、あれを「文化的出口」というらしいのですが、何かそういう情報があると、ああいう手もあるんだということでプツとつながってしまう。真剣に考えず、すぐに実行に移してしまう。



社会とつながる力

ともに働くことの喜び、ともに一緒に生きていけるという見通し、こんな自分でもどこかで関わり合って自分を生かす場所があるという希望、そういったものがなくてなく社会から喪失している時代を若者は生きていくのではないのでしょうか。それなのに学校や社会は、若者にやりたい仕事探手を推奨したり、「個性的であれ」というメッセージを送ったりする。「個性的であれ」と言っても、関係性の中で生きる仕組みがないのに、個性的なんてあるわけがない。自己選択、自己責任というほうが口当たりがいいし、強さをもった自己には響きがいい。

若者自立支援では、施策に引っかけたきた青年は何とかする。しかし、引っかけからない青年が圧倒的に多い。どうやってそこへかけて行くか。引っかかるくらいの青年だったらあまり問題ないと思います。引っからない青年をどうするかという仕組みを社会のなかに立ち上げていかなければならない。

他者との関係性に自信が持てて、自分と

社会との関係を肯定的につなぎ直すことができたなら、若者の職業意識はぐんと広がり、選択の幅も広がり、安心して社会につながることができ、社会的自立へと歩み出す、そういう契機をひとりひとりの中に生み出すことができるのではないのでしょうか。そういうことで今までいろいろなことをやってきました。多くの青年にとってアルバイトの現場に出て行くのはなかなか大変なことです。ですからできるだけ、協同労働のような人を育てようという意志のある仕事の現場へつなげていきたいと思います。キャリアがない青年を受け入れてくれるところは、はじめから使い捨て労働力としてしか彼らを計算していないような現場です。ダメなら来なくていい、と言う。ファーストフードの現場も、店を開くときにたくさんスタッフを採ります。使えないものはどんどん辞めさせていき、3ヶ月後には半分になる。可能性がある子を探って育てるのではなく、たくさん採ってだめなのを蹴っていく。うちに関わっている若者も行って見ますが、3日も持ちません。使いものにならない。自己否定感情を深めてすごすごと退散せざるを得ない。そうこうしているうちに、外に出ていくことに対してますます萎縮してしまう現実があるのではないのでしょうか。

働きながら学び、学びながら働く

Mさんという女の子がいます。小・中不登校で、定時制高校へ行き始めてようやく外へ出られるようになりました。親に対して後ろめたい思いを持っていますから、アルバイトをしなくてはと思っています。でも、

声が小さかったり、ちょっと自信がなさそうであったりしますから、面接、あるいは電話のアポイントの段階で蹴られてしまう。ファーストフードでようやくオープニングスタッフで入りましたが、3日も持たなかった。そこで、何かないかというときに、私たちのNPOで実施した仕事場を巡るフィールドワークで回ったパン屋さんでアルバイトをしたいということになりました。しかし、朝が早い。定時制高校は夜遅い。こんな弱々しい子に勤まるかと思いましたが、それが続くんです。パン屋のおやじさんは、「失敗せえ、やってみろ」「そうか、お前はそういう子だったのか」と、その子をとにかく丸ごと受け入れようとしてくれました。単なる労働力としてではなく、その子がせっかく勇気をもって挑戦しようとしていることに対して、それを支えよう、仕事ができるようになってもらおうという形でやっていく。やりがい、自分が丸ごと受け入れられているという安心感、自分が幸せになれる予感がある現場に出会うことによって若者は変わっていくと思います。

私は会社に入らないで生きてきました。制度としてのオフィシャルな仕組みの中には一切入らないで30数年以上の年月をいわゆるフリーターのような生き方をしてきました。若いときに、自分は豊かな世界に出会うことができるのかという不安がありました。目の前の仕事に対してそれなりにおもしろいと感じながら、将来自分は世界とつながっていけるのかという不安は若いときにあるものだと思います。ルーティンワーク化された日常に埋もれるのではなくて、いろいろな人に出会い、いろいろな世界と出会い、そして自分が成長していくという予感がしないとやりがいを感じない。だか

ら、営利目的でパンを作ってパンを売ってお金を儲けるパン屋さんには、やはり若者は未来を感じることはできない。パンを通して生き方をつくりだしていく、パンを通して人と出会っていく、パンを通して世界をつくっていく、その一員として自分が参入していく、そういう理念と夢がある形でないと、若者は歯をくいしばって我慢しないとと思います。

若者は、ああしなさい、こうしなさいという指示・命令に対してもものすごく反発を感じます。コントロールされることに対して非常に危機感情を持っています。「勝手にやってよ、言うとおりにするから」と言って自分を捨ててしまうというのはその裏返しであって、そこで葛藤しながら自分を実現していくということに対しては非常に自信がない。こうしなさいと言われると、自分が否定されたような気分になってしまう。

Mさんも、そんなふうにかたくなに思っていたと思いますが、指導されることは、人格否定ではなく、よりよい仕事を協同でつ

くりだすための学び合いなんだと感じ捉えることができた時に、気持ちよく先輩や上司の指導を受け入れることができるようになった、というような内容のことを語ってくれました。

厚労省はニートは52万人と報告していますが、定義はまだ曖昧で、引きこもり、失業者等も入れると、15才から24才人口の9.2%、96万人近くが含まれるのではないかと、いう数字もあります。統計がひとり歩きしているのが実情ですが、いずれにしても学校から仕事へのつながりが揺らいでいて、多くの若者が無為な使い捨て労働力として使われたり、そこへの忌避感情から参入することをも躊躇して無為に過ごしていたり、あるいは引きこもってしまったたりしている。多くの青年層が苦悩を抱え込んでいるのではないかと思います。

若者の居場所から立ち上げるパン屋事業

私たちのパン屋事業は、青年たちと一緒に立ち上げた試みです。政府は、若者自立・挑戦プラン、ヤングジョブスポット、ジョブカフェに対してかなり予算をつけているようですが、若者は果たして行くのかということですね。フリーターたちが書いているインターネットの掲示板を読むと、「そういう施策は何か違うような気がする」、「うまく説明できないけど、これでフリーターが減る、ニートが減るとは言えない」、「そんな素直なやつなら、はじめからフリーターにならずに正社員になってるよ」と当事者たちが書いています。今のところ私には、金の無駄遣いになっているケースもたくさんあるけれども、ないよりはいい、という期待し



か感じられません。もちろん運用次第では効果的なものになることも否定はできませんが。

我々のようなやむにやまれぬ取り組みが、日本全国津々浦々で行われています。政府はそれを発掘して協同するべきです。取り組みに対してどう援助するか、どう協同するか、全国的な場にどう広げていくか。なぜそうしないのかといつも聞き取りをされるたびに役人に言っています。いろいろなところに出かけて、足りないものを把握して援助していく。そういう優しさがなかったら、地域での血のにじむような戦いを援助することにならない。

パン屋には地域がいろいろ協力してくれました。一番近くの小学校の校長が全校生徒にピラを配ってくれたり、地元のケーブルテレビが一週間宣伝を流し続けてくれたりしました。立ち上げる前には、地域の人たちにモニターという形で食べてもらって、よりおいしくするために意見を言ってもらいました。1、2年かけてとにかくオープンまでこぎつけました。パンを保育園のおやつに使ったり、職員が集団購入してくれたり。メディアで知った小金井の専門学校の学生がなんか応援したい、うちの学校は購買部もないから学校で売れないかと言って、学生が経営者側に掛け合ってくれて、一日売店をやってみないかということになったり。向かいにあるジブリ美術館のレストランのシェフがこのパンが使えないかと来たり、いろいろと面白い話が出てきています。でもまだまだ熟練していないパン屋なので、生産量が追いつかない。その上、今日は一日ミーティングの日とか、今日は小麦の種まきとか、臨時休業の多いパン屋でして、このままお客さんがついてくれるか不

安です。でもこのようなペースで始まっていくことが大切だと思っています。

開店は11:30で、14:00頃には売り切れてしまうこともあります。パン屋というのはものすごくハードな労働です。朝6時頃から一生懸命やって、天然酵母ですからものすごく手間ひまかけます。ようやく膨らんできた頃に焼いて、11時頃に商品を店に出してぷーんとにおいが来たときには、やっぱりやったぁという感じがします。お客さんが、いいにおいがしてきた、早く食べたいと店に入ってきた時などは感動ですよ。毎日決まってやってくる親子連れですが、これも働く若者を励まします。このような価値を大切にしながら、協同労働の喜びを実感できる職場ができていったらすてきなと思います。厳しくてもつらくても、感動がある限りは若者は働いていきたいと望むのではないのでしょうか。これからも若者たちが一人前になっていけるような働き方を追求していきたいと思っています。



この報告は、2004年12月14日に日本労働者協同組合連合会拡大理事会において行われたものです。(編集部)